

2015春闘の傾向と特徴

—須田孝・連合総合労働局長に聞く

賃上げ要求を掲げての二年目の取り組みとなった連合の二〇一五春季生活闘争。賃上げ回答集計（四月一四日現在）によれば、昨年を上回る賃上げ額を獲得しており、同一の組合で昨年と比べると七〇〇円以上の増加となっている。連合春闘を統括する須田孝・総合労働局長にインタビューし、三月中旬の回答のヤマ場から現在までの回答状況について、今年の傾向や特徴などについて語ってもらった。

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 久々のベア要求となった二〇一四春季生活闘争では、日本経済社会の自律的な成長の観点から「賃上げ」が不可欠という連合方針に対して、正直言っているのか」という空気があった。企業業績や雇用確保を優先して検討してきた二〇〇〇年以降の取り組み経過からすればやむを得ない面もあったが、「合



の誤謬」からの脱却を強く主張したところから、年が明けてだんだんと雰囲気

が盛り上がっていった。ただ、久々のベア交渉で、かつ、労使も世代交代が進んでいることから、ベアへの理解や交渉力などの点で、難しい面もあった。

それが比べれば、二〇一五春闘ではすべての組合で準備して取り組みることができており、継続的に賃上げをしていこうとの思いで一致できた。要求基準を「二%以上の賃上げを求めるとしたが、連合は、継続して「賃上げ」

を実現することが重要であることを踏まえ総合的に勘案した水準とした。JAMやUゼンセンにはまさに連合方針の趣旨を踏まえて三%以上という要求設定をしてもらった形だ。

連合全体では、まだ半分の組合でしか交渉が終わっていないので確かなことは言えないが、昨年の春闘で賃上げできた組合は、今年は昨年にプラスアルファの実績をあげている一方、昨年取れていない組合は、獲得水準は厳しい状況のようだ。

昨年比でプラス一〇〇〇円の賃上げというものが、全体のだいたいの相場感。全体の回答引き出し組合数が昨年よりも多いので、地方の地場組合も健闘していると言える。

中堅組合によるヤマ場形成も

四月一四日現在の回答集計だと、平均賃金方式での定昇相当分込みの賃上

げ率は二・二四%だが、最終的に、昨年に続き二%を切ることはないだろう。また、今年は賃上げに取り組み組合数も増えている。

さらに、回答のヤマ場を含む「先行組合回答ゾーン」（三月一六～二〇日）に回答を引き出した組合数が約八〇〇組合で、昨年よりも約三〇〇組合多い。大手だけでなく中堅組合によるヤマ場の形成もできてきた。

地方の中小・地場も含めた経営側の姿勢をみると、人材獲得のために経営上は苦しくとも、何とか処遇を改善したいと思っている経営者と、依然としてコスト論に固執している経営者とに分かれていると感じる。

地方という点、今回から、地場産業の活性化と働く者の処遇改善をいっそう進めるために、地域関係者によるフォーラムを開催することにした。未組織の労働者は、組織されている会社で何が労使で交渉されているかについて興味を持っている。フォーラムを開催してそうした情報を共有し、「開かれた春闘」を広げていく。今年は四月までに愛知県など三方所で開催したが、来年は春闘前半期での開催をもっと増やしていきたい。

非正規労働者の賃金については、これまで、正社員以上の賃上げを獲得できている。ただ、連合としては、パート労働者の時給引き上げだけに満足することなく、正社員への転換による処遇改善にも力を入れたい。

縦と横の両方の取り組みで格差是正

難しいのは、賃上げの取り組みだけ

では格差改善の取り組みとしては不十分な点だ。賃金制度の整備も並行して取り組みなければいけない。とくに中小では、制度を整備して、格差を埋めていくために必要な賃上げ原資を自分たちで把握できるようにする必要がある。

また、中央と地方の賃金格差を埋めるのに、トリクルダウンはもはや期待できない。地方も自ら、住宅費や社会保障費、教育費なども含めて生活に見合う賃金はいくらなのかという問題意識を持つ必要がある。だから連合は、政策・制度実現の取り組みも含めて、トータルで春闘を行っている。

連合は今回、最低生計費をクリアする水準として、都道府県ごとの連合リビングウェイズを設定。中小はこれを基準に最低到達水準を設定してクリアする取り組みを行っているが、春闘はもともと、産別を通して賃上げを波及させる縦の取り組みだ。この「縦」と地域での「横」の取り組みをつなぎ合わせることで、地域にとどまらない相場波及を発生させて、雇用者の八割以上を占める未組織の労働者も含めた底上げを実現させないといけない。

地方でも経営側は、横をにらみながら、上げ幅を気にする。しかし、底上げ・格差改善に取り組みうえで、本当に大事なものは賃金の絶対水準であり、連合が職種別銘柄賃金など、さまざまな賃金指標を世間相場的に示しているのは、そうしたメッセージの現れでもある。

（荒川創太）